

福沢諭吉における「文明」概念の一考察

—日本における文明概念の先駆として—

はじめに

高 島 秀 樹

本論文は日本における文明概念の先駆として、福沢諭吉（一八三五—一九〇一）の「文明」概念を、その著「文明論之概略」（一八七五）を主な素材として明らかにしようとするものである。

文明という語句そのものは、古来中国において一成句として用いられてきており、日本においても既に室町時代足利義政の世に年号として用いられている（文明：一四六九—一四八七）が、今日一般に考えられるように西欧における civilization の意味・内容に文明の語句をあてはめて用いるようになったのは明治維新前後のことであり、当時西欧の civilization という語句・概念を最も早く理解・吸収し、これに文明という伝来の語句を訳語としてあてはめて用いるとともに、多くの著述を通じてその普及に努めたのは福沢諭吉であった。⁽²⁾ 本論文ではこれらの経緯をふまえて、日本における文明概念の史的展開の出発点を明らかにする意味も含めて、福沢諭吉の文明概念を考察対象として取り上げたものである。

福沢諭吉が civilization の訳語として文明の語句を最も早く用いたのはその著「西洋事情」（初編一八六六）においてであると考えられるが、そこではきわめて短い説明に留まっているところから、本論文では刊行年代は下がるが、文明に関する体系的著述であり、同時に彼の主著の一つと考えられる「文明論之概略」を主な素材として取り上げ

る。また彼の思想の背景には当時の西欧思想、主として近代自然法思想、功利主義思想、道德哲学（F・ウェーランド）があり、特にその文明概念・文明史観の形成には、H・T・バックル（Henry Thomas Buckle 1821～1862）、F・ギゾー（François P. G. Guizot 1787～1874）の影響が強いとされている。⁽⁴⁾ここではその点について深く考察することはできないが、福沢諭吉の文明概念が彼自身の三度にわたる渡米・渡欧体験⁽⁵⁾とともに、これら当時の西欧思想の流れを十分理解・吸収した上で考え出されてきたものである点だけを初めに指摘しておきたい。

一、文明の概念

（一）文明の広狹二義

福沢諭吉は「文明論之概略」の巻之一、第一章を「議論の本位を定る事」と題して、文明に限らず、物事を研究する際にその概念規定を明らかにしなければならないことを主張しているが、これを受けてこの著書の中心題材である文明の概念を明らかにすることが第三章「文明の本旨を論ず」でなされている。

そこでは文明が何物たるか形容することが非常に困難であること、文明について争論があることを述べた後に「もと文明の字義はこれを広く解す可し、又これを狭く解す可し。」と文明に広狹二義のあることを述べ、さらに「其狭き字義に従へば、人力を以て徒に人間の需要を増し、衣食住の虚飾を多くするの意に解す可し。又其広き字義に従へば、衣食住の安楽のみならず、智を研ぎ徳を脩めて人間高尚の地位に昇るの意に解す可し。」とその意味を明らかにしている。後にもふれるが彼は文明を単に狭義の、即ち物質的・日常生活的な意味でのみとらえていたのではなく、広義の、即ち智徳の進歩・人間性の向上の意味をも含めて理解しており、それらの内でも後者を重視する考え方をとっていたことは明らかである。このように文明を広狹二義から把握し、その内容を明らかにしようとした所に彼の文明概念の第一の特色がある。

(二) 相対的・発展的概念としての文明

次に彼は「抑も文明は相対したる語にて、其至る所に限あることなし。唯野蠻の有様を脱して次第に進むものを云ふなり。」⁽⁷⁾と述べている。ここで注意しなければならないことは、文明・野蠻を相互の比較・対比の上で把握しようとしていること、さらに文明が静止的、固定的、絶対的なものではなくて無限の発展の可能性を持つものと考えていることである。なおこの文明発展の段階については別の箇所です。「野蠻は半開に進み、半開は文明に進み、其文明も今正に進歩の時なり。」⁽⁸⁾と述べている。このように文明を相対的、発展的な概念として把握した所に第二の特色があり、同時に日本を文明化しようと考えた一つの根拠があったといえる。

また彼は人類の文明が人間相互の接触・交渉によって発展してきたことを簡明に指摘しているが、この考え方は個人間の相互作用を重視する社会学の主要な一傾向にも相通ずるものがあると考えられ、さらにこれに関連して当時の「市民社会」の理論がそれ自体において自立した社会関係の総体としての社会というイメージを持っており、彼がこれを日本において現実に見出したか否かは別として、理解していたであろうと考えられる点も注意されなければならない。⁽⁹⁾

(三) 智徳の進歩としての文明

さらに彼は議論を具体化して進めて、社会的状況の異なる四つの例をあげている。⁽¹⁰⁾それは一、「唯衣食住の安楽あるのみにて、其智徳発生の力をば故さらに閉塞して自由ならしめず」、二、「智徳の路は全く塞がるに非ず。：然りと雖ども自由の大義は毫も行はるゝことなく」、三、「其有様自由自在なれども、毫も事物の順序なく、毫も同権の趣意を見ず」、四、「人々其身を自由にして之を妨るものなく、：各人其権義を異にすることなし。然りと雖ども、此人民は未だ人間交際の味を知らず」という四つの例である。これについて彼は「一もこれを文明と称す可きものなし」と断定し、これに対して「文明とは人の安楽と品位との進歩を云ふなり。又この人の安楽と品位とを得せしむるもの

は人の智徳なるが故に、文明とは結局、人の智徳の進歩と云て可なり。」⁽¹¹⁾と述べている。

このように彼は文明に広狭二義があつて、その二側面が備わることを必要とするが、それらの内でも文明の基礎となるものは人間の智徳の進歩であつて、これこそが文明の真の意義であると考えている。この点が第三の特色となるが、それは同時に銅直勇が指摘するように、文明の「根底には人間の完全性の実現という大きな理念が存在している」⁽¹²⁾とする十八世紀文明思想と共通する考え方を持っていることを示すものでもある。

この智徳の進歩のうち彼が智と徳のいずれを重視したかについては、両者を「兼備するに非ざれば之を十全の人類と云ふ可からず」としながらも、徳義は「一人の行状にて其功能の及ぶ所狭く」、「開闢の初より既に定て進歩す可らず」とし、これに対して智恵は「人に伝ること速にして其及ぶ所広し」、「日に進みて際限あることなし」としており、また「智恵は徳義の光明を増すのみならず、徳義を保護して悪を免かしむるものなり」と、明らかに智を徳よりも優位においており、⁽¹³⁾ここにも広く西欧諸知識の導入普及をはかった彼の考え方が示されているといえる。なお、この智徳の重視という点については、この章につづいて第四章から第七章までが「一国人民の智徳を論ず」、「前論の続」、「智徳の弁」、「智徳の行はる可き時代と場所とを論ず」と題され、各々この主題についての考察にあてていることから理解される。

(四) 文明と政治との関連

明治初期においては「文明開化」という語句が政治から日常生活にいたる全ての面で一種の目標を示すものとして用いられたことに見られるように、文明という考え方もその本来の意味との異同は別として、政治的な色彩を持つて用いられることも多かったと考えられる。

このような状況の内で、彼は文明と政治の関連について独自の考えを述べている。即ち各国の政治も未だ試験中であることを述べた後に、「唯其文明に益すること多きものを良政府と名け、之に益すること少なき歟、又は之を害す

るものを名けて悪政府と云ふのみ。故に政治の良否を評するには、其国民の達し得たる文明の度を測量してこれを決定す可し。⁽¹⁴⁾と述べている。また「文明の極度に至らば何等の政府も全く無用の長物に属す可し。」とまで断言しており、文明の進歩、内でも「私徳が公德に拡大されるにいたると政治権力も不必要になり、政府も『事物の順序を保つ』ためにのみ存在するという展望をもっていた」⁽¹⁵⁾こと、「政治は独り文明の源に非ず。∴文明中の一局を働くものなり」と述べていることなどからも、現実の政治よりも文明に高い評価を与え、文明が進めば政治の役割は縮少していくであろうこと、また文明への寄与の大小によって政治を評価しようと考えたことなど、文明を重視し政治をその一部もしくは手段としてとらえた点に第四の特色がある。

なお、彼が明治政府をいかに評価していたかについてはここで論ずる余裕がないが、河村望が「一見、明治の『国家秩序』が文明として、『愚民の無秩序』が野蛮としてとらえられているかのようにみえるが、内容は必ずしもそれほど単純ではないであろう」⁽¹⁶⁾と指摘しているように明治政府を文明開化の担い手として単純に肯定しているものではない（特に初期の考え方の内で）ことのみを指摘しておきたい。

二、西洋文明の由来

以上に述べた文明の概念を基礎として、福沢諭吉は西洋と日本の文明の由来（歴史）について述べているが、文明を智徳の進歩と考える所から、それは「衆心発達史」としての色彩を強く持つものと理解される。⁽¹⁷⁾

西洋に関しては第八章「西洋文明の由来」で述べられるが、彼はこの章がフランスのギゾー「文明史」⁽¹⁸⁾に依ることを明らかにした上で、ローマ滅亡以来の文明史を簡略に記している。まずローマを「後世文明の元素」として、ローマが各市の集合体であること、帝国滅亡後も市民会議の風が残存したことをあげている。ついでフランクの野蛮の世又は暗黒の世に入るが、その中でキリスト教会のみが天理人道の貴きを知るものであったこと、次に封建割拠の時代

に入るが、その中にも「フリースティ」があったこと、宗教の面では宗教改革があったこと、さらにこのような時代をへて、一六〇〇～一七〇〇年代になって学問の自由が増大し、政治が停滞・腐敗したのに対し人民の智力が進歩快活して生気が増大し、両者の間の対立は不可避のものとなったことを述べている。このように彼の考えた文明、即ち智徳の進歩が西洋の歴史を貫く一つの大きな流れであり、それが政治の現状と一致しない場合には大きな変革の生じる可能性のあることを実際の例に従って明らかにしている。⁽¹⁹⁾

ここで彼が「西洋文明の由来」と題して論じている内容は実際の西洋文明の歴史であって、必ずしも文明概念・思想がいかに形成されてきたかを明確に説明しているとはいえないが、その記述内容を検討するならばそこには彼の文明概念が明確に反映しており、同時にその視点によって過去の歴史事象を見るならばどのような事象が重視されるのかが明確に示されている。なお彼が文明の語源としてのラテン語の「シウキタス」⁽²⁰⁾にふれていることを彼の歴史的考察の一例証として指摘しておきたい。

三、日本文明の由来

日本文明の由来については第九章「日本文明の由来」で述べられている。そこでは日本の歴史の具体的な事実についてもふれられているが、それ以上に彼がくり返し強調していることは、日本では権力が強大であって、智徳も権力を持つ者のみに偏し、文明発達の阻害条件になっていたという点である。この点を彼自身の言によって見れば、「日本にて権力の偏重なるは治ねく其人間交際の中に浸潤して至らざる所なし」⁽²¹⁾、「有形の腕力も無形の智徳も、学問も宗教も、皆治者の党に與みし、…文明の進退、悉皆治者の知る所にして、被治者は嘗て心に之を関せず」⁽²²⁾、「日本の人間交際は、上古の時より治者流と被治者流との二元素に分れて、権力の偏重を成し、今日に至るまでも其勢を變じたることなし」⁽²³⁾、「此弊害を察して偏重の病を除くに非ざれば、…文明は決して進むことある可らず」⁽²⁴⁾といった表わさ

れている。これらによって明らかのように彼は日本は歴史上、権力が一部に偏重し、学問・智徳に關する事柄も一部の者に集中し、一般の人々がそうしたものにふれる機会が少なかつたために智徳の進歩も進まず、文明も未だ完全に發達してはいないと考えていた。

このような反省をうけて明治維新後彼は智徳の普及、その第一として学問・教育の普及を強く主張するが、しかし権力の偏重が人民の氣風とまでなっている状況の内ではそれにも一定の限界があつて、新しい文明の推進者・文明社会の担い手をどこに求めるかが彼にとって次の課題となる。彼はそれを「ミズブルカラス」に求めようとするが、その内容はきわめて限定された知識階級である「学者」に留り、有効な社会変革の担い手を見出せないままに、人民の智徳の進歩を基礎とする文明概念もそれを日本の現実社会に實現するには変容せざるをえないこととなり、やがて彼の論点の中心は後期になるほど「一身の独立」から「一国の独立」におかれるように變化していった。⁽²⁵⁾

四、福沢諭吉の「文明」概念に対する考察

以上、福沢諭吉における「文明」の概念ならびに西洋と日本における文明の由来と現状に対する考察について検討してきたが、次の点が明らかになったと考えられる。即ち彼の文明の概念の特色は、一、文明には物質的・日常生活的な面と、人間の智徳・品位の向上という面の二面があつて、その内でも特に智徳の進歩を中心に考えたこと、二、ローマ以来の歴史に即し、文明を發展しつつあるものとして、また野蠻との対比においてとらえたこと、三、現実の政治以上に人類に普遍的な存在であり、广大で価値の高いものと考えたこと、の三点に要約され、またその考察はあくまでもローマの「シウキタス」に發する実際の歴史的発展に裏づけられた、実証的な性格を持つものであるといえる。

彼がこの「文明論之概略」を著述・刊行した目的は、全体の結論に當る第十章を「自国の独立を論ず」と題してい

ることと、その内容から明白に理解されるように、西洋文明に比して日本の文明が遅れている現状を指摘し、その原因を考察するとともに、人民の智徳を進歩させるべきことを主張することにあつた。しかしその方法としては、彼自身の市民社会の担い手としての市民に対する認識の限界と、現実における市民階級の不在から、人民自身による自発性にまつよりも、政府に対して人民を啓発の対象としてとらえたことからわかるように、政府（具体的には教育を通して）による指導に中心をおくものであつた。さらに日本において文明を發達させ、文明国とする目的としても、當時の國際的環境と時代的狀況の内、日本を近代国家として確立し、絶対主義的・植民地主義的傾向を持つ西欧諸国の内でその地位を安定ならしめることに寄与すべきこと、即ち彼の言によれば「今の日本國人を文明に進めるは此の国の独立を保たんがためのみ。故に国の独立は目的なり。國民の文明は此目的に達するの術なり。」⁽²⁷⁾という性格を強くうちだしたものとなっている。

このように彼の文明概念は、その内容としては當時の西欧における文明思想をいち早く理解・吸収し、今日においても十分通用しうる内容を持つものと考えられるが、他方いかなる目的で文明を論じ、日本においていかなる目的のために、いかなる方法で文明を發展させるかという点については、彼も決して明治初期啓蒙思想の限界と、その生きた時代の制約から大きく脱け出すことはできなかったといえよう。その後期から晩年にかけて彼の思想は一身の独立を一國の独立におきかえ、國權論に傾斜していったといわれるが、それは単なる思想の変様ということだけでは理解しえないものであつて、明治期啓蒙思想家であり、同時に官職にはつかず在野の地位にありながらも世論形成に大きな影響力を持った福沢諭吉の立場を十分考慮に入れた考察が必要であり、さらに西欧理念と日本の現實の精神風土との間で苦惱する明治以降日本の近代的知識人に共通するきわめて困難な課題がすでに彼の内にも存在したのであらうことを看取できよう。⁽²⁸⁾

おわりに

以上、福沢諭吉における「文明」概念を明らかにするとともに、若干の私見を加えたが、彼の著述はきわめて多数のぼり、一方紙数の制約もあってきわめて限定されたものに留った。さらに今後の課題としては、一、福沢諭吉の思想的变化を年代的に考察し、文明概念の変化を明らかにすること、二、明治初期以降文明概念がいかなる変化をへて今日に到っているかを明らかにすることが残されたといえよう。また筆者自身の研究関心と関連させていうならば日本を文明の遅れた国と考える以上に、中国を代表とするアジアの文明の遅れを指摘する彼が、当時のアジア社会をいかに把握していたのか、またそれがやがて「脱亜入欧」論へと結びついていった過程について考察を深めたいと考えるが、これらについては他日を期したい。

(1) 中国における「文明」という語句の使用例については、銅直勇「近世に於ける文明思想の成立」(明星大学大学院人文学

研究科社会学専攻修士課程における昭和四十八年度社会学理論特講「講義ノート」参照。

(2) 銅直勇「近世に於ける文明思想の成立」

銅直勇「近世に於ける文明思想の形成」一一六頁。

(3) 福沢諭吉「西洋事情」外篇卷之一『世の文明開化』(「福沢諭吉全集」第一卷)三九五～三九七頁。

(4) 斎藤正二「日本社会学成立史の研究」五〇～五一頁、六二頁。

(5) 福沢諭吉の渡米・渡欧体験は次の三回である。

一八六〇年 渡米(幕府遣米使節団の従者として)

一八六一～六二年 渡欧(英仏独等六ヶ国、幕府遣欧使節団の随員として)

一八六七年 渡米(幕府による)

(6) 福沢諭吉「文明論之概略」(「福沢諭吉全集」第四卷)三八頁。

(7) 同前、三八頁。

- (8) 同前、一八頁。
- (9) 河村望「『市民社会』と道徳」一五頁。
- (10) 福沢諭吉「文明論之概略」三九～四一頁。
- (11) 同前、四一頁。
- (12) 銅直勇「近世に於ける文明思想の形成」一二二頁。
- (13) 福沢諭吉「文明論之概略」八八、一一二、一一一頁。
伊藤正雄「福沢諭吉」七二～七六頁。
- 河村望「『市民社会』と道徳」一七頁。ここでは智—徳、公—私の二軸を中心とする詳細な検討が行なわれているが、本論文では紙数の制約上ふれることができなかった。
- (14) 福沢諭吉「文明論之概略」四九頁。
- (15) 河村望「『市民社会』と道徳」一八頁。
- (16) 同前、二二頁。
- (17) 河村望「日本社会学史研究 上」五七頁。
- (18) これはF・ギゾー「欧州文明史」(Histoire de la civilisation en Europe, 1828)を指す。福沢諭吉は本書著作に際しこれと、H・T・バッケル「英国文明史」(History of Civilization in England 2vols. 1857～61)を参考にしたといわれる。
- (19) 福沢諭吉「文明論之概略」一三三～一四三頁。
- (20) 文明 civilization の語源としての civitas については、銅直勇「近世に於ける文明思想の形成」一〇七頁参照。
- (21) 福沢諭吉「文明論之概略」一四六頁。
- (22) 同前、一五三頁。
- (23) 同前、一六八頁。
- (24) 同前、一七一頁。
- (25) 秋元律郎「日本社会学史」二四～二五頁。
河村望「日本社会学史研究 上」五八～五九頁。

- (26) 秋元律郎、同前、二五、二八頁。
- (27) 福沢諭吉「文明論之概略」二〇七頁。
- (28) 本節作成に当っては次の研究に大きな示唆を得た。
秋元律郎「日本社会学史」二四～三三頁。
- 河村望「日本社会学史研究 上」四八～五九頁。
- (29) この点についてはすでに次の研究が公にされている。
今永清二「福沢諭吉の思想形成」(特に第五章「福沢諭吉のアジア観」、第六章「福沢諭吉の『脱亜論』」)。

〔参考文献〕

- 福沢諭吉「文明論之概略」(「福沢諭吉全集」第四卷) 昭和三四年、岩波書店。
- 福沢諭吉「西洋事情」(同第一卷) 昭和三三年、岩波書店。
- 福沢諭吉「学問のすすめ」(同第三卷) 昭和三四年、岩波書店。
- 福沢諭吉「福翁自伝」(同第七卷) 昭和三四年、岩波書店。
- 「福沢諭吉年譜」(同第二二卷) 昭和三九年、岩波書店。
- 家永三郎編「福沢諭吉」(「現代日本思想大系」2) 昭和三八年、筑摩書房。(特に家永三郎「解説 福沢諭吉の人と思想」論文)
- 鹿野政直「福沢諭吉」昭和四二年、清水書院。
- 会田倉吉「福沢諭吉」昭和四九年、吉川弘文館。
- 鹿野政直「日本近代思想の形成」昭和五一年、辺境社(再刊)
- 河村望「市民社会」と道德——福沢諭吉を中心に(「東京都立大学「人文学報」No. 一三一」) 昭和五三年。
- 伊藤正雄「福沢諭吉」昭和五四年、春秋社。
- 今永清二「福沢諭吉の思想形成」昭和五四年、勁草書房。
- 河村望「日本社会学史研究 上」昭和四八年、人間の科学社。
- 斎藤正二「日本社会学成立史の研究」昭和五一年、福村出版。
- 秋元律郎「日本社会学史」昭和五四年、早大出版部。

銅直勇「近世に於ける文明思想の成立」(講義ノート)。

銅直勇「近世に於ける文明思想の形成」(明星大学「研究紀要—人文学部」第一〇号) 昭和四九年。

〔付記〕

筆者は昭和四八年度に明星大学大学院人文学研究科社会学専攻修士課程において銅直勇先生の「社会学理論特講」を受講したが、その講義内容は「近世における文明思想の成立」であって、一年間の講義が終了した後には講義内容に関連ある問題についてのレポートの提出を課せられ、提出したレポートに修正・加筆したものが本稿である。筆者はもとより文明の問題を自己の研究課題とする者ではなく、その理解も浅薄であって、先生の多年にわたる文明研究を思うと本稿の公表にも逡巡を感じるが、先生の追悼記念号の刊行に際し直接先生のご指導と関連するものとして、あえて本稿を掲載させていただくものである。

(たかしま ひでき、本学助手)